《裁縫する若き女(ミレーの摸写)》1928年

向井潤吉の足跡

その写実表現の探求

古典名画の摸写から、民家への道程

1997年7月5日[土]—9月28日[日]

開館時間＝午前10時—午後6時(入館は5時30分まで)

休館日＝毎週月曜日(休日にあたるときは翌日)

観覧料＝一般200円(160円) 大高生150円(120円) 中小生100円(80円)

( )内は20名以上の団体料金　65歳以上の方160円

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

《春塘(埼玉県川越市郊外)》1984年

向井潤吉先生の画家としての歩みをかえりみると，その原点は大正3年，13歳の時に京都市立美術学校に入学，その後15歳の時に関西美術院にうつり，絵画表現の基礎とも言える素描を中心とした勉強をされた頃にさかのぼります。

このあいだに，油絵具による制作の基礎的な技術も身につけられましたが，やはり，先生がもっとも力を入れられたのは，モティーフとなる対象のかたちを的確に把握しようとする写実力の鍛練であったようです。

先生の画業の数々をふりかえると，先生にとって，眼に映る対象のかたちと表情を，いかに豊かで活き活きとした筆致で写実できるかということが，終生の課題であったということがうかがわれます。

先生は油絵具やカンヴァスなど材料研究と，色彩表現の研究のために，昭和2年から5年にかけて渡欧され，ルーヴル美術館において，アングル，ルノワール，コローなど古典名画の摸写作品の制作をされました。

そして，原画に表現されているかたちや，色彩はもとより，絵具の劣化によっておこった画面上のこまかい亀裂までをも見落とさない，原画至上主義ともいえる制作態度を貫かれ，ここで制作された摸写作品は21点に及んでいます。

帰国後には，人物などを主なモティーフとして創作活動を展開されましたが，その後，日本が戦争への道を歩み始めると，多くの画家が報道班員として従軍することになり，向井先生もそうした画家の一人として，戦地をめぐることになります。

先生が戦地で目の当たりにされた，戦場のようすや，戦闘に疲れた兵士の表情は，多くの素描作品として残されており，これらの作品は，先生がそれまでに培われてきた確実な写実力によって，臨場感をともなったものとなっています。

そして，戦後になって，制作が始まった民家をモティーフとする膨大な作品群は，まさに先生のライフワークとなりました。

戦禍によって，そして戦後の復興と高度経済成長の中で急速に失われていく民家の姿に心をひかれ，つねに現場におもむいて制作が重ねられた数々の民家作品は，先生が培われてこられた写実表現の成果がいかんなく示されており，その表現の豊かさと繊細さは年を経るごとに広がり，深まっていきます。

しかし，民家作品の数々を通じて私たちは，写実性の高いその絵画表現の充実だけを感得するのではなく，先生が心にいだかれた，風土に根ざした民家へのただならぬ想いが創作の原動力となっていること，またその想いが，作品の一つ一つに溢れていることに気づくのではないでしょうか。

《田麦俣にて（山形県東田川郡朝日村田麦俣）》1963年

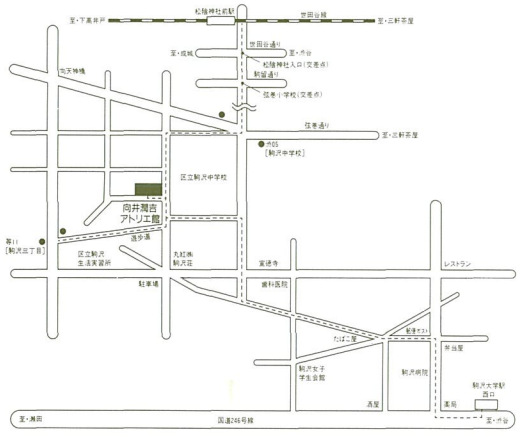
《早春の水路（埼玉県川越市下新河岸）》1982年

《ばらの花を持つ女（ルノワールの摸写）》1927年

《イエウの集落》1937-44年頃

《泉（アングルの摸写）》1929年

《不詳（軍用機内無線師）》1937-44年頃



世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1
TEL 03-5450-9581

●最寄り交通機関のご案内

東急新玉川線［駒沢大学］　駅西口　下車／徒歩10分
東急世田谷線［松陰神社前］駅　　下車／徒歩17分

東急バス（渋05）渋谷～弦巻営業所　［駒沢中学校］　停留所下車／徒歩３分
東急バス（等11）祖師谷折返所～等々力［駒沢三丁目］　停留所下車／徒歩３分
東急バス（渋11）渋谷～田園調布　［駒沢大学駅前］停留所下車／徒歩10分
東急バス（渋13）渋谷～砧本村　［駒沢大学駅前］停留所下車／徒歩10分